

# カトリック 仙台教区報

2012年3月25日 No.204  
発行  
カトリック仙台司教区  
〒980-0014  
仙台市青葉区本町 1-2-12  
Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378  
発行責任 広報委員会  
URL http://sendai.catholic.jp/

## 3・11 東日本大震災から1年

### 犠牲者追悼と復興祈願ミサ

東日本大震災から1年、地震発生から午後2時46分には、日本中で被災者のために黙祷した。仙台教区カテドラル(元寺小路教会)では、平賀司教司式のミサが行われた。500人を超える参列者で聖堂は満員。2時30分からこの1年の復興への取り組みをまとめたスライドが上映され、2時46分に1分間の黙祷。写真に続いてミサが始まった。ミサの説教で平賀司教は、「(復興に向けて)祈りによって神からの力添えをいたさながら、できる限りこの働きを継続して行きましよう」と呼びかけた。(以下、説教全文)

3月11日が巡ってきました。昨 関東の広い範囲で発生しました。年のこの日、午後2時46分、日本 における観測史上最大規模のマグニチュード9.0を記録する大地震が発生しました。宮城県沖130キロメートルの海底が震源でしたが、震源域は岩手県沖から茨城県沖まで南北500キロメートル、東西200キロメートルの広範囲に及ぶとされています。地震に伴って発生したのが大津波です。

場所によっては波の高さ10メートル以上、陸地に押し寄せた最大の高さが40メートル以上にも及ぶという大津波が、東北地方と関東地方の太平洋沿岸を襲い、多数の市町村に壊滅的な被害をもたらしました。津波以外にも、地震の揺れや液化現象、ダムの決壊、地盤沈下等による大変な被害も東北や



は立ち入り禁止とされ、住民は放射能被害からの長期にわたる避難を強いられています。立ち入り禁止ですから、地震と大津波被害からの復旧作業も手付かずという状態がずっと続いています。大変なそれこそ「未曾有の」災害となったわけですが、一方で、

この大災害発生後すぐ、日本国内からそして全世界から、被災地救援の温かい手が差し伸べられました。本当にありがたいことです。国内ではカリタスジャパンの組織挙げてのサポートをいただいています。札幌教区から那覇教区まで、日本全国各教区・教会から、男女修道会から、たくさんの方の学校やグループから、多大な犠牲を払っての支援を頂いてきました。国外からは、ベネディクト16世教皇様はじめバチカンのいろいろな部局から連帯とお見舞いのメッセージや義援金が届けられました。全世界から、特に韓国をはじめとするアジア・欧米・オセアニアの国々の多数の司教協議会や教区、小教区や学校、会社や団体個人からも続々と届けられました。この善意のメッセージや義援金もさりながら、ボランティアとして被災地救援に来られる方々にも本当に感謝申し上げなければなりません。日本全国から馳せ参じてくださいました。震災発生後のまだ寒い時期にも、真夏の酷暑の日も、そして再び雪が降る寒いこの冬も、と、本当にありがたいことです。

すべての人の父である神が、このような善意の人々にたくさん恵み・祝福をもってお返しくださるようにと、深い感謝の心をもって祈りたいと思います。さて、本日のミサは、大震災からちょうど一周年という日に当たり、犠牲となられた方々を

### 生命の泉

大震災から1年が過ぎた。瓦礫の処理は1割にも満たない。また自然としていっているような年月が過ぎていくような感だ。1年が過ぎてこの震災から信仰の面を学んだことがあるか。「絆」という言葉が激震から1か月後、諸外国からの支援に感謝して内閣総理大臣がメッセージで使った。これも、この言葉には「マスコミ」の取材を受ける人たちの言葉じゃなくて人の言葉、マスコミが使っている言葉と感ずる。しかし、震災という体験は被災しよつとしまいと誰しも当事者として抱えなければならぬものだ。今を最良の状態に生きるために、最善を想定しなければならぬという教訓を得た。千年に一度の災難は千年後とは限らないのだから、言つてもなく人は自然の中に生きるものとして条件付けられて生きてきたことを忘れてはいけない。科学の進歩に期待し専門家に任せていけば済む話ではない。天災は避けられないが少しでも減災するために経験から学ばなければならぬ。原発事故は起こり始めても世界的な事故だ。豊かに便利に生きることを望んだとしても放射能は時空で私たちのレベルを超える。世界を平穏にするためにできることがある。人を孤立させてしまった豊かさの見直しは大きな課題だ。「人は強けりては生きていけない」という私たちの存在としての限界、また引き渡すべき未来への私たちの責任など学ぶべき事柄は多い。今、私たちの支援は、人それぞれに自立して生きることにへの支援と、孤立しては生きられない私たちの弱さへの共感である。(守)

この大災害発生後すぐ、日本国内からそして全世界から、被災地救援の温かい手が差し伸べられました。本当にありがたいことです。国内ではカリタスジャパンの組織挙げてのサポートをいただいています。札幌教区から那覇教区まで、日本全国各教区・教会から、男女修道会から、たくさんの方の学校やグループから、多大な犠牲を払っての支援を頂いてきました。国外からは、ベネディクト16世教皇様はじめバチカンのいろいろな部局から連帯とお見舞いのメッセージや義援金が届けられました。全世界から、特に韓国をはじめとするアジア・欧米・オセアニアの国々の多数の司教協議会や教区、小教区や学校、会社や団体個人からも続々と届けられました。この善意のメッセージや義援金もさりながら、ボランティアとして被災地救援に来られる方々にも本当に感謝申し上げなければなりません。日本全国から馳せ参じてくださいました。震災発生後のまだ寒い時期にも、真夏の酷暑の日も、そして再び雪が降る寒いこの冬も、と、本当にありがたいことです。

### 四旬節にあたって

司教 平賀徹夫

今年、2012年の四旬節は2月22日の灰の水曜日から始まりました。この四旬節にあたり、ベネディクト16世教皇様は『ヘブライ人への手紙』から、「互いに愛と善行に励むように心がけましょう」（10・24）との一節をテーマとするメッセージを發表されました。そしてこの言葉はキリスト者の生活の3つの要素、すなわち「他者への思いやり 兄弟姉妹に対する責任」、「他者への思いやり 相互愛というたまもの」、「愛と善行に励む 聖性のもとに共に歩む」という簡潔かつ貴重な、そして非常に時宜を得た教えが記されていると述べながら、「キリスト者が主への愛と忠誠のあかしを新たにしよう求められる社会において、私たちが皆、愛と奉仕と善行のうちに互いに思いやりをもつことの緊急性を実感することができますように」と呼びかけておられます。今年の四旬節には、教皇様のこの呼びかけにこたえ、思いを新たにしたいと生きていきたいと思ひます。

追悼し、また、復興に向けて父である神からの助け・力を願ひ求める特別の意向でささげられます。どうか慈しみの父である神が、亡くなられた方々に永遠の憩いを与えてくださいますように。また被災された方々に、今の困難と苦しみを乗り越えて生きてゆく力と勇気を与えてくださいますように。この方々は、神からの助けと周りの人からの支えを本当に必要としています。

緊急避難所に身を寄せられた方々は、半年過ぎたころから「仮設住宅」や「見なし仮設住宅」に移されました。あるいは建物の一部が津波で壊れたけれども自分の家が良い、と自宅に住んでいる

方々もいます。被災して苦しい不便な暮らしを余儀なくされている方々です。家や仕事や、家族をも突然に失った悲しみの中にある方々です。

昨年10月、岩手県のある教会を訪ねたとき、一人の20歳代の女性に会いました。彼女の母親はフイリピン人、父親は日本人ということでしたが、あの大津波で両親とも亡くし、今は、アパートで独り暮らし、とのことでした。幸い（と言えるでしょうか）二人の遺体は見つかり火葬もできて、遺骨は教会の香部屋に仮安置させてもらい、日曜日や仕事帰りに時間があったときなど、訪ねて来ているとのことでしたが、どれだけ

神からの助け、周りの人々からの支えを必要としていることでしょうか。同じような境遇の方々も決して少なくないでしょう。大震災から1年経ち、だんだんと被災地・被災者が忘れられていく時期です。怖いのは、被災した方々の中でも特に、引きこもってしまったり、表立って取り沙汰されない社会的に弱い立場、いわゆる「谷間」にある方々が、置きざりにされたまま忘れられてしまつていくことです。

この点で、「苦境にあるあなた方を忘れていません」との気持ちを表す『お茶つこサロン』や仮設住宅訪問などは大きな意味を持つています。待つのでなく出かけていく活動は、以前のカトリック教会にはあまり見られなかったすばらしいことです。そして、教区の方々に御礼を申したいと思ひます。大震災直後からの「仙台教区サポートセンター」の救援活動に、祈りによる支えや支援金提供、ボランティア参加等、本当によく協力してきてくださいました。独自の支援活動に当たってきた小教区や修道院もあります。また、教区の4、6、45計画への参画として、多くの

小教区や修道院が、例えば青森県の教会や修道院の岩手沿岸地域との関わり、岩手県でも内陸部から沿岸部への支援や交流、仙台市内の教会や修道院による被災地支援や仮設住宅訪問、福島県の教会の仮設訪問や沿岸部教会との交流等々、が続けられています。今後とも思いを新たに祈りによって神からの力添えをいただきながら、できる限りこの働きを継続して行きましよう。それは、今日の第2朗読で聴いたように、「わたしたちと与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれている」ことの表れでもあるからです。



一方で、大震災から1年経ったのに、被災地の広範さで行き届かない被災者支援の遅れの深刻さ、復興のはかばかしくない状況、進まない何千万トンのガレキ処理、そして、原発事故による全く見通しの立たない避難生活を余儀なくされている人々の様子などを目にするとき、わたしたちのできる働きが何ほどの役に立つのか、全くの無力感に覆われる感じがすることもあります。しかし、そこであればあるほど、先ほど聴いた福音のイエス様の言葉、「気を付けて、目を覚ましていなさい。」というお言葉を深く受け止めて置く必要がありません。わたしたちが主キリストを通して信じているのは、全能の、慈しみの父である神です。現在のわたしたちの使命はまさに、「家を後に旅に出る主人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、また門番には目を覚ましておられるように」と言いつけておくようなもの、という状況が当てはまります。心が鈍くなることのないよう気を付けましよう。そして、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」との主のご命令をいつも心していたいものです。

### 司教日程

3月・4月

- 3・25 司祭志願者認定式(元寺) 原町教会
- 30 責任役員会
- 26 仙台教区サポート会議 侍者講習会(元寺)
- 4・1 枝の主日
- 4 聖香油ミサ
- 5 聖木曜日
- 6 聖金曜日
- 7 聖土曜日
- 8 復活の主日
- 10 司祭評役、教区司祭団・役員 宮城県南教会
- 15 宣教司牧評 役員会
- 21 教区司祭団月例会
- 23 部落差別人権委事務局会議
- 27 29 校長・理事長・総長・管区長の集い

# 仙台教区 12 分割司祭派遣案

(司祭評議会作成)

現在司祭数 36 名 2 月 19 日現在・教区外からの応援司祭を含む)

将来(2年後)司祭数 25 名

	地区	小教区	巡回教区	司祭数
1	青森	*本町 浪打	松ヶ丘	1
2	津軽	*弘前 五所川原 黒石		1
3	南部	*八戸塩町 鮫町 十和田 野辺地 大湊 三沢 二戸 久慈	五戸	3
4	盛岡	*四ツ家 上堂 志家		1
5	岩手沿岸	*釜石 宮古 大船渡 遠野		2
6	岩手内陸	*一関 北上 花巻 水沢 千厩		2
7	宮城県北	*石巻 気仙沼 築館 米川 古川	新生園 大籠	3
8	仙台中央	*元寺小路 一本杉 豊屋丁 西仙台 東仙台 北仙台 八木山 塩釜		5
9	宮城県南	*大河原 亘理 白石 角田 原町		2
10	福島地区	*松木町 野田町 二本松	桑折	1
11	会津	*会津若松 喜多方 南会津		1
12	福島県南	*郡山 須賀川 白河 いわき	小名浜 湯本 矢吹	3

\*印の教会は核になる教会(拠点教会)  
地区名は現在地区として成立しているところの他はすべて仮名。

## これからの仙台教区を考える

平賀徹夫司教は、2月19日付の「2012年・四旬節にあたって」からの仙台教区を考える」と題した仙台教区の皆様に宛てた文書を発表された。東日本大震災で、大きな被害を受けた仙台教区を助けていただきたいと司教協議会に SOS を出し、大津波で被災した沿岸部にある教会に司祭を派遣したいので、手薄になる小教区のために司祭を派遣していただけないかとの願いを出した。これに心えて、日本のカトリック教会は3管区(長崎・大阪・東京)から3年間司祭を派遣するとの回答があり、さらに男子修道会・宣教会の管区長協議会からも司祭を送ることを約束してくれた。現在6名の司祭が派遣されている。3年の期限が切れると(すでに1年が過ぎているのであと2年後)53小教区と8巡回教会をどうしたらよいか昨年から司祭評議会と全司祭の集いで話し合いを重ねてきた。

司教文書によると、まず、一部で県境をまたいで12の地区に分割教会は神の子らの集いであり、小さい集いをも大事にする姿勢を保つこと。また、全地区が必ずしも「共同宣教司牧」というものではない。

一つの教会に一人の司祭というものはもう絶対に無理な状況なので、その地区にいる司祭・信徒・修道者全員が協力して、教会

の在り方を現す有機的な一つの交わりを形成していく。地区制の中の交わりとして、地区内で働く司祭の支援、教会建物の修理や営繕についても地区内の教会が一緒になって支え合うことを意識してほしい。

2013年度には、この地区制を導入することを目指したい。またこれに沿った司祭派遣は2014年度には行いたい。

最後に、「キリストに結ばれた新しい創造」とならせていただいた人々(神の子ら)の集いである教会は、神の導きのうちに、絶えず日々新たに成長していきまます。慈しみの主からの豊かな恵みが、仙台教区の皆様の上に注がれますように」と締めくくられています。

なお、この案については今後各教会からの意見を吸い上げ、司祭評議会・宣教司牧評議会を検討を重ねていく予定。

### 「ハンセン病市民学会」

開催のお知らせ(第一報)  
今年5月12日(土)と13日(日)

に「ハンセン病市民学会 青森 宮城大会」が青森市と登米市で開催東北には松丘保養園(青森県)と新生園(宮城県)の二つの国立療養所があり、今年の市民学会はこれら二つの施設を会場として開催することになった。一日目は青森で総会、全体会などを行い、二日目は青森と宮城に分かれて分科会などを開催。教区人権を考える委員会は、「正義と平和と仙台協議会」とともに「ハンセン病問題を考える市民の集い」の一員としてこの学会の実行委員会に参加している。詳細は第2報でお知らせの予定。どなたでもご参加いただけますので、ぜひ多くの方にご参加いただき、ハンセン病問題について理解を深める機会にしたい。 (教区人権を考える委員会)



### ニンビィと社会

(廃棄物処理を例として)

NIMBY (Not In My Back Yard) という言葉があります。文字通り「私の裏庭でなければ」という意味です。廃棄物処理などの関係でよくお目に掛かる言葉です。自分の裏庭がゴミ捨て場(たとえば廃棄物処理施設など)になることを望む人はいないでしょう。たとえばその様な施設が我々の社会生活に必要なことが解っていても、それで「自分の裏庭でなければ」ということになります。

でも何処かに作らなければなりません。自分の裏庭でない何処かに施設が出来ればあとは無関心、それでは問題の本質は解決されずに残ります。何処か? それは誰かの裏庭かも知れません。

自分の裏庭でなくても関心を持って、社会の全員が納得できる解決を求めて行くことが大切ではないでしょうか。「無関心」は「愛」の対極です。「ニンビィ」に留まっていたはいけません。(地球を大事にする会 白石 豊)

絆のローソク・ワレ



須賀川教会 11・10・30  
大震災、放射線の拡散、豪雨による浸水と今なおやりきれない日々が続く。しかしどんなに苦しくても神様は私たちを決して見放さない。必ず寄りそってくれる。旧約のヨブがそうであったように、そのことをしっかりと信じて歩いてゆく。



郡山ザベリオ学園中学校 11・10・26

私達は孤独じゃない  
私達には光がある  
私達に希望の光  
あふれる



会津若松ザベリオ学園中・高等学校 11・10・18

今回の東日本大震災で、大切な人をなくした方、帰る場所をなくした方、心に大きな傷を受けた方々に、私たちの祈りが届きますように。  
福島で生きる！ 福島を生きる！！  
聖母マリア様、私たちをいつまでも見守り、勇気を与えてください。



イエスのカリタス修道女会  
白河修道院 11・10・31  
我らみな兄弟 一つの家族  
大震災によって離れ離れになった家族、友人たちがキリストにおいて再び一つに結ばれ、絆のローソクに希望の灯がともされたように、4つの県がもっとももっと大きな一つの家族となって新しく創造されていくことができますように。この出来事の記憶が薄れ、忘れられることのないように祈り続けましょう。



郡山ザベリオ学園幼稚園

11・10・28

3月11日の大震災をこえて、つらい時、悲しい時こそ喜びを見つけること。  
小さな時間の中に祈ることの大切さを、そしてたくさんの人々の中に神様を感じる事ができました。  
神さまが共にいてくださることに心を強めて笑顔で歩んで行きたいと思



郡山教会 11・10・23  
日々神様に感謝しております。大地震、原発事故、豪雨被害で苦しんでいる方々のために祈ります。一日も早く平安な日々が訪れますように。



白河教会 11・10・29・30

全能永遠の父である神よ、わたしたちの行いが、いつもみ旨にかなうよう導いて下さい。御子キリストのうちにあって豊かな実りを結ぶことができますように。  
聖堂が被災したため、29日と30日の2回司祭館の畳の間でミサ。



郡山ザベリオ学園小学校 11・10・25

“福島で生きる” “福島を生きる”  
～詩人 和合亮一さん～  
10月はロザリオの月。全校生で日本の復興と世界の平和を願って、毎日お祈りしました。どんな状況にあってもみんなで手をとりあい、共に生きていくことができますように。





原町教会 11・11・27

祈りのうちに

2011年3月11日(金)午後2時46分。東北地方の太平洋側にマグニチュード9.0という大地震が襲いかかりました。それに伴って「大津波」が沿岸部に押し寄せました。さらに東京電力原子力発電所で大きな事故が発生し放射能が大量に大気に漏れ、ここ南相馬市は、原町教会も含め、地震、津波、放射能3つの苦を背負うことになりました。

原町教会の信者は、原子力発電所の放射能事故による警戒地域、計画的避難区域、緊急時避難準備区域、それ以外の区域に住んでいました。事故によって多くの信者(27人)が区域外、県外に避難しました。津波で親戚を失った信者もいます。地震の被害を受けた原町教会は、日本全国の皆様の支援のお陰で元以上に修復されました。また、多くの方々を訪れて、ボランティア活動や傾聴活動をしていただいています。

ここまで、原町教会が復興できたことに感謝しつつ、地震、津波で犠牲になった方々、大切な人をなくされた方々、住宅や仕事をなくされた方々、戻りたくとも戻れない遠くに住む方々に思いを馳せ、絆のローソクの祈りをささげます。



聖ドミニコ修道会

小名浜白百合幼稚園 11・11・14

震災で苦しみを強いられている全ての方が、生きる力を取り戻し、小さな喜び、小さな幸せを感じる復興の日が来ますように。神父様と、子どもたちがともしたローソクが希望となり、祈りが神に、そして苦しみの中にある方々にも届きますように。



勿来カトリック幼稚園 11・11・14

人と人とのつながり、その絆の深さを大切に、寄り添って助け合い、支え合いながら、心を強く持ち、一步一步前進して頑張ってください。今日は私たち保育に従事する者として、将来を担う子どもたちが生きる力、そして夢と希望が膨らみ、豊かな心で歩んで行けるよう、このローソクの火に祈りを込めました。

みんなの笑顔が  
一つになりますように



白河カトリック幼稚園

11・11・1

私たちの仲間だった岩崎りゅうき くん とるあ ちゃん、そしてお母様の魂が永遠の安息のうちに憩われますように。放射能の不安のため退園したすべての園児たちと、その家族を見守ってください。神さま、大地震によって苦しむ人々のために、あなたの助けを願い犠牲をささげ、祈り続けます。



小名浜教会

11・11・13

仙台教区の南端、小名浜教会で絆のローソクを囲んでごミサを捧げることができて、絆の中に結ばれていることを改めて感じました。いつまでも悲しんでいないで、ローソクの光の中に希望を託していきたいと感じました。全国の皆様から、励ましの言葉と物資とボランティアの協力を頂きありがとうございました。自分たちはもっと祈ることを誓います。



いわき教会 11・11・19.20

聖霊来てください。  
「主において私たちはひとつ」のもと、最も弱い人々のために働く力があたえられますように。



湯本教会 11・11・13

60年の心のよりどころ、信仰の心を育ててくれた教会の聖堂は解体されました、残った司祭館の一室をミサの場として祈りをささげています。淋しい思い、苦しい現実の中で、絆を強め、主への感謝としての小さな小さなミサを大事にしています。



# 震災を越えて前へ！ 仙台教区「新しい創造」この一年を振り返る

## サポートセンターの1年

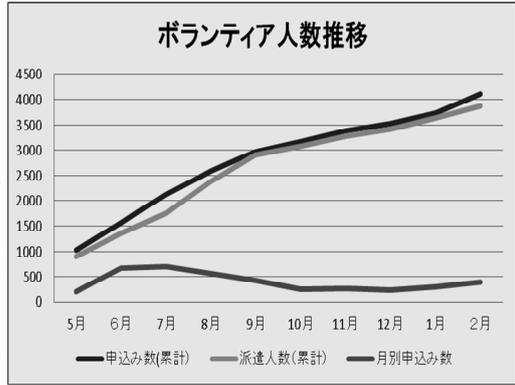
3月11日の東日本大震災直後に立ち上げられた「仙台教区サポートセンター」も、もうすぐ1年を迎えます。その間、いろいろなことがありました。実に多くのボランティアが被災者を心配し、なんとか復興に役立ちたいとやって来られ、多くの活動をしてくださいました。



米川ベース

米川は、津波被害に遭っていません。しかし、

最初の頃は、第1次支援活動と呼べる「物資配布」と「がれき撤去」が主流でした。この活動のために、まず3月21日、塩釜教会にベースが置かれました。次いで、3月24日に石巻ベースが、4月2日、釜石ベースが、そして、4月30日、米川ベースが活動を開始しました。これらの各ベースは、各カトリック教会が拠点ベースとなりました。この中で、塩釜、石巻、釜石は津波の被災地にありませんが、米川は、直接、津波被害に遭っていません。しかし、米川ベースで働くボランティアたちは、もっと広いところを探していたところ、地元の人から「ここを使っていたらよ」と集会所を買ってくださるようになりました。これは、地元の人々が、本当は自分たちが南三陸の支援をしなけれ



その近くにある南三陸は、甚大な被害を被ったところです。その支援のために、米川ベースが準備されました。

最初は、こうして教会をベースにボランティアの方々が受け入れられていたのですが、石巻、米川は、ボランティアの方々が宿泊してくださるためには、あまりにも手狭なため、石巻は教会近くの被災した1軒の店を改修し、ベースとしました。

米川ベースで働くボランティアたちは、もっと広いところを探していたところ、地元の人から「ここを使っていたらよ」と集会所を買ってくださるようになりました。これは、地元の人々が、本当は自分たちが南三陸の支援をしなけれ

ばならないのに、多くの若い人たちが明るく手伝ってくださっているのを見て、好感をもつて受け入れてくださっていただけです。

このようにして、受け入れ体制が整えられ、活動が活発になっていきました。こうして、5月の連休、夏休みというボランティア・ラッシュの時期を乗り越えることができました。しかし、10月に入り、大学生が学校に戻ると、ボランティアの方々が減っていきまし。それでも、年末年始の休暇が終わる時までは、何とかボランティアをしてくださる方がいらっしやいました。



その後、今は、激減という状況になっております。ボランティア活動の内容は、がれき撤去から傾聴活動へと移行して行っています。米川ベース、ボランティアの方々の助けが必要で、各ベース

を中心に、がれき撤去、漁師さんの網の修理、写真のお手伝い、仮設住宅での移動力フェなど、皆様のご協力をお待ちしております。

## カトリック医師会

### 仙台支部の活動

東日本大震災の発生後、3月24日、日本カトリック医師会(JCMA)本部は東日本大震災救援基金を開設。会員のみならず、団体や国外からも義援金が寄せられ、仙台支部と福島支部に送られた。この救援基金を基に、主に津波被災地を対象に活動を行ってきた。

岩手県、宮城県とも3月末から4月初めまでは安否確認を兼ねて会員のもとを訪れ、医薬品・経口補水液・手指消毒液などを提供。岩手県宮古市、7月、会員に対し医療機器の費用一部提供。9月、仮設住宅の集会場に血圧計・体重計セット30個提供。

大船渡市 4月、気仙医師会に中古車一台提供。7月、気仙薬剤師会に医薬品救急セット用の不足医薬品を提供(大船渡市・陸前高田市の仮設住宅に胃腸薬、便秘薬各一千個)。

陸前高田市 4月末、6月、米崎診療所で医師の診療ボランティア活動(会員延べ8名が参加)。

宮城県気仙沼市 4月、気仙沼市立病院に医療器材・物品の提供。5月、会員に対し医療事務用パソコン一台提供。8月、気仙沼医師会附属高等看護学校に援助金を提供。6月初め、8月末、気仙沼市総合体育館で看護師の医療ボランティア活動(聖ウィンセンシオ)。

ア・パウロの愛徳姉妹会のシスター4人、日本カトリック看護協会(JCNA)メンバー2人、うち3人が2回参加)。

仙台市 7月、光ヶ丘スベルマン病院に医療機器の費用一部提供。さらに、8月下旬から神戸の精神科医、小林和(こばやしかず)先生大阪支部が定期的に岩手県、宮城県を訪れ、ボランティアで講演と個別相談をして下さり、仙台支部はその準備と移動を手伝っている。先生は「トラウマ」を専門とされ、災害後の心の変化、トラウマとPTSD、注意すべき症状など基礎知識の普及が続けられている。

心のケアは、今後長期間にわたる必要かつ重要なケアであると考えられる。支援に携わる方々、支援を受ける方々とも知っておいていただきたい内容なので、近くで講演会がある場合には、是非ご参加してください。気になる症状がある、気になる方がいるなどの場合は一人で悩まず抱え込まず、「災害支援者ストレスほっとらいん」(TEL. 020-586-373・月々金12時、20時相談無料)をぜひご活用下さい。

この度のJCMA仙台支部の活動にご協力いただいた皆さんの方々にお礼を申し上げます。JCMA仙台支部

溝口 由美子(東仙台教会)

# 「3.11から1年」...今思うこと



大野文子(30代女) いわき教会  
 震災後 出会う人々がとても優しく感じられた。そしてみんなの、一生懸命に日々をおくる姿にとても力を頂いた。  
 あらためて私は、「こゝいわきです」と暮らしていきたくて思いました。  
 小林和江(60代女) 原町教会  
 感謝の心で...皆様のご支援とお祈りありがとうございました。  
 あの時、私たち小さな原町教会は、トリプル災害にあったのでした。教会の屋根瓦は落ち、聖書や写真はじめ全ての部屋で壁が落ちてしまいました。どうしたものかと思つ間もなく原発事故で避難となり、街はゴーストタウン化してしまいました。  
 あの時の悪夢から奇跡が起きたように仙台教区

の支援で一番早く改修していただき、すっかりきれいな教会になりました。  
 長い間司祭の居住しない教会に、今は梅津神父様がいらつしやるので昔に戻つた感じですよ。  
 希望のあかり...苦しみはなくならない。けれどこの災害で、より主を信じ、主と共に祈り、歩むことの大切さを実感しました。たくさんの実りが豊かにありました。  
 主日のミサには、東京、千葉、鎌倉、福島などからおいで下さり、ミ

川邨 裕明 神父 (大阪教区時報編集長)  
 東日本大震災から半年たつて、信じることは難しい。政治や科学の言葉を簡単に信じられなくなつた。不信は隔たりを生んでいる。信じられるのは、顔と顔を合わせて、互いの誠実さで結んだ絆だけ。  
 望みのないところで人がまとまるのは難しい。肝心なときに人はばらばらになつていく。人がまとまるためには、希望でも欲望でも野望でもいい、望みがなければ。  
 愛することはできて、愛し続けることは難しい。愛は冷めやすい。燃え上がつてもすぐに下火になつてしまふ。冷めた愛を温め直すには、寄り添つてほかにない。  
 熾火おきびになつたとき火でも芯にはしっかりと熱をもっている。信じたい。そこに望みをかけた。それこそホンマものの愛。イエスさんが十字架で示してくださつた、信・望・愛の火を燃え上がらせるた

サがにぎやかにになりました。街を通る人々が教会に明かりがついているので、改めて教会の存在に気がつき親しみを持ってくださっています。  
 菅野 晶子(50代女)いわき教会  
 例年なら秋に種をまいて春の収穫を楽しみにしていた野菜が、放射能不安で作れなくなつて残念。  
 大野 俊子(聖ウルスラ修道女会)  
 昨年来、東日本大震災を取り上げた新聞記事やテレビのニュース番組などで被災者からよく、「いつまで

ために、空気を送り、新しい薪をくべ、手を尽くして火をおこしたい。その思い一つだけは今も胸に燃えている。  
 浦野 雄一神父(豊島教会)  
 東日本大震災から1年が過ぎ、振り返る機会をいただきました。今思つたことを、正直に述べるなら、「消化不良」でしょうか。  
 大震災が発生し、何かしたいものの、自分一人ではいかんともしがたい中で、人事で仙台に派遣されるのができました。しかしその派遣も半年足りずで終了し、それもアキレス腱切断という中途半端な「おまけ」付きでした。10月23日の西仙台教会のミサも未消化のままです。

でも「消化不良」が解消される時が来るでしょう。まずは「これから1年」です。半年足らずではありましたが、貴重な「出会い」がありました。この出会いが何らかの形で展開していくなら、私の

も悲しんではかりもいられない。「下ばかり向いてはいけない。上を向いて一歩でも進まなければ...」といった言葉が聞かれます。しかもその言葉は悲壮感や気負いよりもむしろ、日本人らしく物事を静かに受容する落ち着きが感じられます。私はこれらのことを耳にするたびに感動を覚えずにはいられます。そこにはまた先の見えない厳しい現実には置かれながらも、希望を失っていない人々、前を向いて生きようとする人々の姿を見ることができ

「消化不良」が多少改善されるかもしれない。そんな期待を内に私の秘めた今です。  
 守田 亮子(京都教区大津教会) 広報編集長  
 心を空っぽにして  
 今回の大震災で本当に問われるのは「人間のあり方」であり、我々にとっては「教会のあり方」ではないのだろうか。  
 最近の教会を見ていると、どこも視線が内向きになつていっているように見えてはいたが、ない。「地域に根ざす教会」、「開かれた教会」と言いながら、あちこちに壁を立ててはいないだろうか。カトリック信者としてのプライドからなのか、教会という社会的な肩書にこだわら過ぎるからなのか、阪神大震災の時に、鷹取教会の司祭を務めていた神田裕神父が「地域に根づく教会」という文章のなかで、「神父」という肩書ではなく、神田裕で関わりなければなりません」と書いていた。今こそ

きるからです。これらの人々のうちには、信仰のあるなしにかかわらず、人間に内在する希望による生命力が見えるように思われます。  
 自らが強制収容所生活を体験したV.E.フランクはその著書「夜と霧」の中で、想像を絶する過酷な状況の中でも生き延びることができた人は、希望を失わなかつた人と、愛する人を持っていた人であると、真に意味深い言葉を述べています。人は希望によって生きるといえるでしょう。

我々が考えなくてはならないのは、まさしくここではないだろうか。十字架を屋根に戴く建物だけが教会ではない。人が集まるところにこそ本物の教会があるはずだ。この一年は、被災地から遠くにある我々にとつても試行錯誤の時間であった。これからの時間は、教会という建物から出て、カトリック信者という肩書の衣を脱いで、一人の生身の人間として被災地に目を向けなければならぬのではないだろうか。マザー・テレサの言葉に「神様は空っぽのものだけを満たすことが出来ませぬ」といつのがある。心を空っぽにして、神の言葉を待ち、人ひとの声を無心に聞くことが今一番必要なことだろう。そうすれば、きつと本当に必要とされている支援活動が見えてくるにちがいない。  
 肩書をそつと横に置いて、被災地の人ひとの本物の姿に、「目を向けて」、生身の情報を伝え続けていくと思つて。

「心を空っぽにして」、「一緒に歩き続けよう」。

# 鎮魂の祈り

## 東日本大震災1周年ミサ 2月15日東京カテドラル関口教会聖マリア大聖堂

日本カトリック司教協議会(日本カトリック司教団、会長池長潤 大阪教区大司教)は東日本大震災1周年を前にして、2月15日(水)午後5時から司教団主催による『犠牲者追悼と復興祈願ミサ』を、カトリック東京教区カテドラル関口教会聖マリア大聖堂で挙行された。



写真提供 = サンパウ

現役の司教17人全員と駐日ローマ教皇大使、シヨゼフ・チエノットウ大司教、司祭団の共同司式によるこの荘厳ミサには在京の24の国や地域の駐日外国大使とその夫人代表ら40人が参列。物々しい警備の中を、数百人の会衆と共に2万人にも及んだ犠牲者・行方不明者の永遠の安息と、これからも続くであろう長くけわしい復興への歩みに父なる神の力強い導きを

### 祈り求めた「写真」。

はじめに、「災害から数カ月の間になされた、日本人々の毅然とした一致ある対応が、現在進行する復興の努力の中でも続けられていくことを確信しています」という、教皇ベネディクト16世の意を受けて教皇庁国務省長官のタルチジオ・ベルトーネ枢機卿が作成した池長潤会長あてのメッセージが、チエノットウ駐日ローマ教皇大使によって日本語で朗読された。

説教の中で被災地の司教である平賀徹夫天台教区司教は、1年前の歴史的なあの大地震に際して、国内外から数多くの物資や義援金、励まし、祈りをいただいたことに改めて深く感謝を表明。また大震災による甚大な被害と司教自身が体験した被災者の悲しみや絶望・孤独に触れて、「今もつとも怖いのは、時の経過につれて、一番弱い立場に置かれた被災地の人たちの存在が忘れられてしまつことだ」と、『記憶の風化』を強く懸念した。その上で平賀司教は、当日読まれた福音「求めなさい、そうすれば与えられる。探しなさい、そうすれば見つかる。

門をたたく者には開かれる」(マタイ7:7)を引用して、「このみことばがシンプルであればあるほど、私たちはこのみことばを信じる必要がある。『悲しむ者の目から涙をこごとく拭い去つてくださる』その神が、今なお苦しみの中にある人々の嘆きや悲しみを知らないはずはない。父なる神への深い信頼のうちに、本当に『祈る者』になりたいものである」と、愛と慈しみの神への信頼を力強く呼びかけた。

(中央協広報・藤崎 智之)

### 宮城宗教学人連絡協議会主催 合同慰霊祭

宮城県内の宗教学人各宗派が参加して、大震災によって犠牲となつた方々の霊を慰めようと、3月9日(金)名取市閉上の、通称「日和山」で慰霊祭が行われた。同協議会の会長齊藤軍記(天理教)が、慰霊の言葉を述べ、各宗派の代表によって献花が行われた「写真」。この慰霊祭に、神戸



### 仙台教区「新しい創造」県大会のお知らせ

#### 仙台司教区 2012年青森県の集い

- [日時] 2012年6月10日 10:00~15:00
- [場所] 八戸聖ウルスラ学院中・高等学校
- [テーマ] 常に新しい創造へ  
~主においてわたしたちはひとつ~
- [受付] 9:00~10:00
- [司教メッセージ] 「仙台教区 常に新しい創造へ」
- [講演] 「津波を超えて、闇から光へ」
- [講師] 山浦玄嗣 氏
- [ミサ] 13:00~14:30

#### 2012カトリック岩手県大会

- [日時] 2012年7月16日 10:00~15:30
- [場所] 盛岡白百合学園
- [テーマ] 「さあ、また立ち上がろう!!」
- [受付] 9:30~10:00
- [司教メッセージ] [各県発表]
- [講話] 東京教区 岡田 武夫 大司教
- [ミサ] 14:00~

\* 教区の皆様のご参加をお待ちしています。

から阪神大震災の復興のシンボル「1・17希望の灯り」の火が分灯されて届けられ、参加者に紹介された。

### ラシャペル神父を偲んで



1月15日、キリスト教一致祈禱週間、一致祈禱会、三枝干洋

師 (日本基督教団陸前市川教会 副牧師) 説教より。

あの日、アンドレ・ラシャペル神父は、ここ、カトリック元寺小路教会から塩釜へと向かったラシャペル神父を向かわせたのは何か  
塩釜に向かったのは、彼の羊を守るためだった  
主キリストから託された、自分の羊を指摘した  
そして、彼の地で神に与えられた大勢の震災犠牲者に寄り添つよう



ユリアナ Sr. 清水 道子 (聖ウルスラ修道会・一本杉修道院)

ただ「そこにいる」寄り添つた  
その深い意味を知っている人だつた  
「私の羊を飼いなさい」とおつしやつた主の命に、最期まで忠実に生きた人だつた  
ラシャペル神父は、「そこにいる人」だつた  
1919年1月4日 誕生  
1947年10月15日 入会  
1951年8月22日 初誓願  
1954年8月30日 終生誓願  
2011年12月27日 帰天 92歳  
聖ウルスラ会で邦人最初の入会者  
入会后60余年にわたり聖ウルスラ学院音楽教室の室長として多くの子どもたちにピアノを教えた  
音楽を通して神を賛美する生涯だつた。